



震災遺構「大川小」にサルスベリを植える崎山館長(右端)ら114日、石巻市

津波防災伝承へ心一つ

石巻・大川小 和歌山の関係者植樹

1854年の安政南海地震津波を伝える「稲むらの火の館」(和歌山県広川町)の関係者らが4日、東日本大震災の津波で児童・教職員計84人が犠牲になった石巻市の震災遺構「大川小」で児童遺族らとサルスベリを植え、津波防災の伝承へ心一つにした。

火の館の崎山光一館長(73)らが、同館に植えられ

ていた高さ約1・8メートルのサルスベリを持参。大川小6年の次女真衣さん(12)を亡くした鈴木典行さん(58)らと植樹した。

崎山館長は「(和歌山県は)南海トラフ巨大地震の被害が想定されており、津波犠牲者ゼロを目標に、東日本大震災の被災地と連携して津波伝承に取り組んでいきたい」と話した。

鈴木さんは「木を贈ってくれた人たちと伝承に向けた思いを共有し、大事に育てていきたい」と語った。

石巻市で被災地支援に取り組む和歌山市青年団体協議会が火の館に植樹を働きかけた。協議会は2021年から「ともだちの樹」として石巻市の公園などに木を植える活動を進める。4日の植樹には協議会員を含む約50人が参加した。 〓